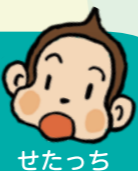


一緒に学ぼう

川内 美彦
アクセシビリティ研究所

教えて!

川内先生



せたち

Q4 あの人は使えるのに、だれかが使えないというのは、不公平だよ!



そう、自分に合った「やり方」ができないのは「平等」ではありません。「差別」です。障害を理由に「差別」したり、「平等に暮らす権利を侵害」してはなりません。他の人と平等に出かけて、平等に使えるように、周りが変わる必要があります。

Q5 でも、みんなの「やり方」を用意することは難しい気がするな。



どんな「やり方」にすれば良いか話し合っ、お互いに納得できれば良いのです。例えば、車椅子を使う人がエレベーターのない2階のお店に用があるとき、2階に上がることが無理なら、店員さんがそれを説明して、1階で商品を選ぶよう希望の商品を持って来る等、代わりのやり方で解決することもできます。

Q6 なるほど。では、「他の人と同じように使えるため」には、どうしたらいいの?



人権や尊厳を大切に作る社会には「平等」が重要です。大多数の人とは違う「やり方」をする人のことを無視したり、変に思ったりするのはなく、その人なりの「やり方」や違いを尊重することで、その人の人権と尊厳を守り「差別」を生まない社会をめざしましょう。

Q1 先生! バリアフリーなのに使えない人がいるのはどうしてなの?



バリアフリーは大事ですが、万能ではないからです。人によって「やり方」が違うため、使えない人がいるのです。

Q2 「やり方」って、どういうことなの?



障害のある人は、何かするとき、多くの人とはやり方が違うことがあります。例えば、車椅子を使う人は移動に足ではなく車椅子を使います。視覚に障害のある人は目で見るのではなく、点字や音で情報を得ます。「できない」のではなく、「やり方」が違うので不便な思いをするのです。

Q3 多くの人とは違う「やり方」をする人は不便を感じるんだね。それって、大変じゃない?



そうです。障害のある人の暮らしづらは、自分たちに合った「やり方」ができないから生まれているのです。問題は、他の人が自分と違う「やり方」を知らないことや、違う「やり方」を受け入れてくれないことです。

インタビュー

当事者が本当に欲しい情報



柴田留理
元特別支援学校教諭

ある日、私は聞こえない友人と4人で、美術館に行きました。手話で話しながら展示物を見ていたとき注意事項を説明するスタッフがいました。私たちは立ち止まり説明を聞こうとしたら、スタッフは私たちを見て、なぜか英語版案内ボードを差し出してきました。「この人聞こえにくいのかも?」と考えるより、「外国人なのかも」と判断したようです。

相手の言っていることが聞こえずとまどったり、自分たちの発音が悪かったりすると、相手から私たちが外国人だと判断されることが多いのです。手話を使っているのに、英語で話しかけてくる人もたまにいます。話しかけられても、気付かず反応できない聴覚障害者もいます。その時、話しかけた人は「聞こえていないかも」と思うより、「無視された」と思ってしまう。

聞こえにくい人が身近にいるかもしれないにも関わらず、「聞こえにくいのかも、聞こえていないのかも」と想像してくれる人は少ないのです。

私は、生まれつきの聴覚障害ではなく、人生の途中で聞こえにくくなりました。そのため、母語は日本語であり、第二言語として英語、第三言語として日本語を習得しました。普段の生活では補聴器をつけて、口話(※1)でやりとりをすることが多いですが、手話を使う友人と話すとき等、手話を使って話すこともあります。場面によっては、手話通訳や音声認識システムの使用等文字でのやりとりをお願いしたりしています。聴覚障害者とコミュニケーションを取る際は、聞こえ方やコミュニケーション方法を様々であることを思い出して、どんなコミュニケーション方法が良いか本人に聞

いてください。

まちには多様な人が暮らしていますが、施設の多くが歩けない人や見えない人、聞こえない人等、多様な人のことを考えずに作られています。それは「社会の仕組み」や「環境」に障害者の存在が想定されていないことが多いからです。障害の有無に関係なく、どんな人にも不利にならない環境を考え作り出すことで、より多くの人の社会への参加が可能になります。そのためには、多様な特性がある方々(障害当事者等)の意見を聞くことが何より大切です。

そして、「聞こえにくい人がいるかも」「この人聞こえていないのかも」と想像してみる、想像力も大切にしてほしいと思います。

※1 口話:口の形から言葉を読み取り、伝えたいことを声に出して話すコミュニケーション方法

